



教員の手引き

1. 授業の参考例(10分間で、教材を使用する場合)

ねらい 世界にはどうして学校に通えない子どもがいるのか、また、学校へ通っていたとしてもどんな問題をかかえているのか知る。

授業が始まる前に・・・		
・子どもたちには、世界の学校について世界同時に学習することを伝えておく。 ・教材は、授業日の前にあらかじめ掲示して、子どもに見せておく。		
教師	子ども	備考
「世界一大きな授業を始めます。」 授業のねらいを確認する。		4月23日(水)午後一時スタート
テーマ1 (1面) 「この子たちは学校に通っていません。どうしてでしょうか。」 写真ごとに、通っていない理由を説明する。 テーマ1まとめ 「世界には、子どもたち自身ではどうしようもできない理由で、学校へ行けない子どもたちがいます。」	写真から、学校に通えない理由を考える。	写真 家の借金返済のために働く子ども。 写真 戦争へ借り出される子ども。人を殺すことの善悪の判断もつかないうちから、巻き込まれ、心に深い傷を負う子どもも多い。(子どもが持てる軽い武器がつくられています。) 写真 戦争が終わっても校舎がない。親も亡くしたので、兄弟の世話をしなくてはならない子ども。 写真 12歳の結婚式。特に、女の子は結婚したら勉強は終わり、あとはずっと働き続ける。
テーマ2 (2面) 「学校に通っていても、いろいろな問題があります。私たちの学校とどこが違いますか。」 テーマ2まとめ 「学校へ通っていても、しっかり学ぶことのできない子どもたちもいます。」	写真から、学習する時に、どんな問題があるかを考える。	写真 教科書、ノートは全員がもっているわけではない。中には、先生の話す言葉が全く分からない子もいる。 写真 一人の先生が100人以上の子どもを教えている。電気がない。 写真 教室が暑すぎるため、外で勉強する。激しい雨が降ると教室のトタン屋根に打ち付ける音で、授業にならない。
世界一大きな授業のまとめ 「日本とはずいぶん事情が違いますが、子どもにとって勉強がとても大切であるというのはどこの国でも同じです。外国の子どもたちが抱えている問題を解決するのは簡単なことではありません。しかし、今日、私たちが世界一大きな授業で世界の現実を知ったことは、勉強できない子どもたちの状況を変えるための大きな一歩となります。」 「世界一大きな授業を終わります。」		

2. 授業が終わったら

- ギネス登録用紙に必要事項を記載し、キャンペーン事務局に FAX する。4 月 30 日締め切り。
- 可能な場合は、記念撮影をしてください！差し支えなければ、写真をお送り頂き、キャンペーンのホームページ、報告書等でご紹介させていただきます。
- 2008 年 7 月に参加証をお送りします。「世界一大きな授業」に世界で何人参加したかもご報告します。



3. 補足

- 授業の流れはあくまでも参考例ですので、先生ご自身で組み立ててくださってももちろん結構です。お願いしたいのは、次の二つのテーマには必ず触れることです。
テーマ 1. 「どうして学校に通えないのでしょうか。 = 教育から排除される子どもたち」
テーマ 2. 「私たちの学校とどこがちがいますか。 = 教育の質」
- ワークシートを同封いたしましたので、ご自由にお使いください。また、授業後の子どもの感想、先生のご意見等をどうぞお送り下さい。ホームページ等でご紹介させていただきます。
- 約 10 分間の映像教材もご用意する予定です 4 月 10 日以降、ホームページからダウンロードできます。

4. 写真解説

インドのバンガロール

2004 年春撮影。レンガ焼場で借金のかたに働かされている子どもたち。この状態は債務奴隷と呼ばれ、最悪の形態の児童労働の一つ。レンガは一つ 5 キロもあり、とても重い。

シエラレオネの子ども兵士

2004 年撮影。シエラレオネでは、市民内戦が 11 年間(1991 年～2002 年)続いた。政府転覆とダイヤモンドの利権が戦争の主原因。政府軍と RUF (革命連合戦線)の双方に子ども兵士が使われた。RUF 側の幾つかの部隊では 80% が子ども兵士であり、6 才の子どもでさえも兵士として強制された。結果として、15,000 人から 20,000 人の子どもが兵士として戦争にかりだされる結果となった。

アフガニスタン

内戦で破壊された建物の前にたたずむ兄妹。世界中に 7,300 万人いる学校に行けない子どもの約半数が、アフガニスタンをはじめとする紛争下もしくは紛争の影響を受けた地域に暮らしている。それらの地域では、家だけではなく、子どもが学んだり、遊んだりする上で大切な存在である学校も破壊されてしまう。戦争後、教育環境が復興するには時間がかかり、治安が安定しないため学校へ通うことを不安視する保護者も多い。また、戦禍で親を亡くした子どもは、年下の兄弟の世話で学校へ行けない子も多い。

ネパールの結婚式

結婚式にのぞむ 10 代の少女。幼くして、親が決めた相手と結婚しなければならない。ネパールをはじめとする一部の地域では、幼くして結婚する「早婚」が伝統的・習慣的風習となっている。早婚により幼くして出産することは、母子の健康に関するリスクが高くなるだけでなく、教育を受ける機会も奪われてしまう。

ラオスの小学校

低学年の教室。教科書が、各生徒にそろわないため、教科書の内容を黒板に書いて暗記する方法がとられている。教員の多くは、教職課程を修了せずに教えている。義務教育は小学校(1年から5年次まで)のみで、学齢よりも入学する年齢が上(例えば、10歳で入学する)の場合も多い。就学前教育(幼稚園、保育園等)を受けていない児童が大半。教科書、ノート、筆記具の不足、就学前教育を受けていないこと、母語と教育に使われる言語が異なるために授業が理解できない、進級試験が導入されているなどの理由から、落第や中退の数が多い。落第率は、1年生が約30%、2年生が約20%、3、4年生で10%台、5年生は数%。退学率は、1年生が約20%、2~5年生は10%未満。(2003年・2004年、ラオス教育省統計より)。

西アフリカのトーゴ

2005年撮影。教室や椅子が足りないため、一つの教室に多くの子どもたちが込み合って座っている。人口の約50%が18歳以下の子どもである(2008年ユニセフ白書統計)。他の途上国地域と同様、アフリカの多くの国でも、一教室あたりの児童数が多いことが問題視されている。また、教員の待遇が低く、欠勤の多さも問題の一つである。

ネパールの青空教室

子どもに見合った数の校舎がないため屋外で授業を受けている。ネパールをはじめとする一部の地域では、このような青空教室で子どもたちが勉強しなければならず、雨期や暑さなど天候が原因で学校が休みになることもある。屋外ということで子どもたちが授業に集中することも難しい。また、校舎がある地域でも、安い素材で建てられた校舎は長持ちしない。建物の作り方が悪いと風が通らず、部屋が蒸し風呂のように暑くなる。激しい雨が降るとタン屋根に当たる音で授業にならない。

5. その他

なぜ教育が必要なのか。

今日世界では、7,300万人の子どもたちが学校に通えず、8億人の成人が読み書きができないと言われています。教育を受けることに必ずしも具体的な目的は必要なく、学ぶこと自体が子どもや成人にとっての権利です。しかし、過酷な現実に向かいあわざるを得ない途上国の人々にとっては、教育は人権であると同時に、人生を変えるための強力な武器となります。例えば、アフリカでは、女子の教育年数が1年延びるだけで、自分の子どもが5歳未満で死ぬ確率が8%減る、低所得国では、若い女性の平均収入は、教育を受ける年数と共に10%から20%増えると言われています。(2008年GCEキャンペーン資料より)

「世界一大きな授業」で学んだことを子どもがどう生かすのか。

募金活動など、目に見える形で支援することだけがこの授業の成果ではありません。今回の授業で「世界の教育問題を知る」という種を蒔いたことで、子どもや先生の行動に何かしらの影響を与えることを期待しています。

教育から排除される子どもたち

・貧困

多くの子どもたちは貧しい家計を助けるために強制的に働かされ、貧困家庭の子どもたちや孤児は、学費を払えず、学校に通えません。

・地理的な問題

多くの国には、十分な数の学校がありません。一番近い学校が何十キロも離れた場所にあるならば、交通手段が発達していない限り通うことはできません。

・女子

途上国の貧困家庭の多くは、女の子より男の子の教育にお金を使います。また、女の子にとって、学校まで通う途中も危険であり、場合によっては教室内で性的嫌がらせを受けるなどの理由で学校へ行けないこともあります。早婚、トイレが男女別に分かれていないこと、女性教員の少なさなどが、さらに女の子から学校を遠ざける要因となります。

・紛争による影響

紛争の影響により難民や国内避難民となった子どもたちは、数年間または数十年間を難民キャンプで過ごさなければならず、教育の機会を失うこととなります。

・少数民族

途上国の中には、偏見のために少数民族が通える場所に学校を建てることを後回しにする国もあります。多くの国では、少数民族が話す言葉で授業を行うことを認めないため、彼らにとって言語は主な障害となります。学習が理解できない学校からは自然と足が遠のくこととなります。

教育の質

多くの途上国では、学校へ通う児童・生徒数の増加に注力し、学習環境がおざなりにされているという指摘があります。その結果、学習効果は低い結果に留まらざるを得ません。それに加えて、教員への給与の未払いや教える環境の悪さから、教員自身のインセンティブが育たず、教員の欠勤の多さが問題となっている国も多くあります。また、教育制度の未整備から、必ずしも正式な資格をもった教員が教壇に立つとは限らず、子どもたちの学習環境は大変粗悪であると言えます。このような現実から、教育の量(学校に通う子どもの数)を確保することと同時に、教育の質をも重視する姿勢が求められています。

児童労働

義務教育や遊ぶこと、発言することなど「子どもの権利」を奪い、子どもの成長や発達に精神的・肉体的に害を与える仕事を児童労働といえます。世界に2億1,800万人、7人に1人の子どもたちが学校に通うことができず、心や体に悪影響のある有害で危険な労働を強いられています。子どもの健康的な成長を助け、責任感や技能を身につけることができるような仕事とは区別されます。

6. 途上国の教育問題についてもっと知りたい方は、NGOのホームページをご覧ください。

主催 教育協力 NGO ネットワーク ホームページ: www.jnne.org

実施 「世界一大きな授業」キャンペーン事務局

(構成団体: ACE、オックスファム・ジャパン、シャンティ国際ボランティア会、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、プラン・ジャパン フリー・ザ・チルドレン・ジャパン、ラオスのこども)

お問い合わせは

(社)シャンティ国際ボランティア会内 教育協力 NGO ネットワーク(JNNE) 担当:松本・三宅

〒160-0015 東京都新宿区大京町 31

TEL: 03-5360-1233 FAX: 03-5360-1220

Eメール: gaw2008@hotmail.co.jp

ホームページ: www.jnne.org/gce2008